

板橋区基本構想審議会(第6回) 意見メモ一覧

No.	分野	意見
1	福祉・介護	1 地域住民の参加のための支援と行政・福祉専門職との協働について 今後10年の福祉について、行政や福祉施策だけで担っていくことは不可能である。地域住民も社会福祉の重要な構成員であるという視点を持ち、地域住民等の参加・活動を支援する取組を検討する必要がある。具体的には、地域住民や福祉事業に携わる専門職の活動の場を確保・提供し、行政と福祉専門職が連携できるような施策を中心に置くため、使用していない区施設等を積極的に活用すべき。 2 権利擁護の視点について 後期高齢者の増加とともに認知症も増加する。どれだけ良いサービスを作っても区民が利用にたどり着けず、利用に際して権利が擁護されなければ意味がないので、認知症の方、障がい者の方など、上手に判断することが難しい方々への支援が大変重要である。国では、「権利擁護支援」として、地域連携ネットワークにおける権利擁護支援策の一層の充実などの成年後見制度利用促進の取組を推進することとしている。生活弱者の方々が、安定した本人の望む生活を確保するため、区も体制の整備だけではなく、サービスを利用すること自体が難しい方の参加支援の視点を取り入れ、「権利擁護」について基本計画に盛り込む必要があるのではないかと。 3 AIPについて “Aging in Place”は、「いま生活しているその場所で幸せに年を取りなさい」と受け取られかねない。最近WHOが提唱している“Age Friendly Society”や“Age Friendly Community”という言葉であれば、国や区が国民・区民のために希求するべき姿を現しているの、基本構想の考え方、記述としてもふさわしいと感じる。 この提案で行政に求められていることは、『住居 / 交通機関 / 屋外スペースと建物 / 地域支援と健康サービス / コミュニケーションと情報 / 社会参加 / 尊重と社会的包摂 / 市民参加と雇用』である。 4 その他 ○資料ではヤングケアラー問題にも言及しているが、この分野が高齢者と障がい者と生活保護者のみに焦点を当てた論点となっていることに違和感を感じる。 ○区でも「シニアの読み聞かせ講座」が行われているが、「子育て分野」との連携が重要だと考える。全国では高齢施設と保育園が一緒になっている施設もあり、子どもにとって成長や生産力を高めていくことを求められる環境だけでは、生きづらさを感じる子もいるのではないかと。ゆっくりと余裕のあるお年寄りと接する機会は、情操教育にもなり、とても良い組み合わせだと思う。 ○民生委員の不足・減少問題は深刻であり、今後も増加は見込めない可能性がある。板橋区内大学や介護学校との連携を強化し、福祉の仕事に就くことを考えている学生に、一定の研修などを受けてもらった上で、民生委員サポーターのようなかたちで協力してもらえ、仕組みをつくってはどうか。学生にとっても、良い経験になるのではないかと。 ○グローバルな視点で学んできた若い世代の斬新なアイデアを積極的に聞き入れる仕組みを考え、現在抱えている問題を若い世代と共通意識として共に解決していく姿勢も重要であると思う。 ○医療機関も深刻な経営問題を抱えているので、産業振興公社や民間企業と連携し、区でも医療従事者がアウトソーシングにより業務効率を上げる仕組みを構築することはできないか。また、診察効率の悪化による医師の負担・診察時間、待合室混雑など軽減するため、想定される病院での質問事項などを、待合室や区役所のディスプレイで流しての説明、出張所や商店街会館、回覧板などで周知できないか。

No.	分野	意見
2	健康	1 居場所の支援の重要性について 健康活動を維持していくためには、様々な講座やサポーターの養成だけでなく、仲間づくりが重要である。独りでは続けていくことが困難であり、健康は人と触れ合うことで効果が倍増すると考える。また、健康に関する啓発も、住民主体で「地域」で意識を変えていくことが効果的であると思う。区は、健康に取り組む人の仲間づくり(組織化)やサポーターの養成とともに、活動する「場」の提供も必要である。 区の生活支援体制整備事業の「支え合い会議(第二層協議体)」は、各地域センター圏域で毎月20～30名の地域の方が集まり、地域の支え合い活動や地域課題の解決について協議を行っており、23区内でも類を見ない区の誇る住民主体の地域組織である。また、社会福祉協議会では「福祉の森サロン活動支援事業」において、地域の方が主体的に集う活動を支援しており、現在、330か所のサロンがある。これらの組織を活用したり、サロンとの連携を推進したりすると、さらに効果があると思う。また、これらに対しても、地域住民が活動する場所について、対策を講じていただきたい。 2 フレイル予防について 区が長寿医療センターなどと連携し、進めていたフレイル予防策としての高齢者へのDM健康調査の実施などについて、「予防」の一環として明記してほしい。 ○昔から「腹八分目」と言われているが、近年、摂取カロリーを抑えて消化器官の負担を減らすことで、長寿遺伝子と言われているサーチュイン遺伝子を活性化させることができることが解明されている。健康長寿をめざすため、「食べ過ぎは健康を損ねることがある。食べ過ぎた、と感じたら胃を休めましょう」や「腹八分目を心がけましょう」といった消化器官に負担をかけない食事のとり方についての発信を施策に追加してほしい。